

嚴復の初期言論活動について

— 中学と西学の葛藤 —

王 閏梅

キーワード 伝統と近代、中国伝統思想、西洋思想、洋務思想、変法思想

1. はじめに

日中両国が近代社会に移行する過程で、言論・出版活動は極めて大きな推進・宣伝の役割を果たした。日本より近代化が遅れた中国では日本とよく似た状況から出発し、日本から多大な影響を受けた。それゆえ中国の知識人が近代化を目指して展開した言論活動の実態、日本との関連で研究することはいっそう重要な意味を持つと思われる。

そうした知識人のなかに、翻訳家として活躍した嚴復がいる。嚴復はイギリス留学して帰国してから15年後に言論活動を開始した。彼は西洋思想の書籍を翻訳するさいに、難しい桐城派古文を用い、中国の古典思想を案語¹というかたちで訳文に多く挿入し、古典的語彙を訳語に多く用いた。この事実は、彼が目じた西洋近代思想と中国の正統的古典思想とを相互に関係づけようとしていたことを示している。それゆえ、新聞の論説なども初期にはおこなっていたものの、とりわけ彼の翻訳活動が中国の近代化に大きな影響を及ぼしたということが言えよう。本稿では、このような言論・翻訳活動を始めたころ、いかに嚴復が中学と西学との関係を理解したかを詳しく考察してみたい。

2. 言論活動を始める前の嚴復

嚴復の言論活動をよりよく把握するために、まず彼の思想や行動の原点となる時代背景や生い立ちを探って見る必要がある。この節では言論活動を始める前の嚴復を概観しておきたい。

嚴復は1854年に福建省に生まれた(1921年没)。その生まれた年は阿片戦争の六年後にあたり、太平天国が南京に定都した年でもあった。彼は郷紳²の家に生まれたが、父の代になるとすでに普通の庶民階級とそれほど変わらないような

経済状況になった(このことは母が庶民出身という点からも裏づけられる)。父親の嚴振先³はその地方でちょっとした名声を博した医者であり、1866年に死ぬまで、息子の教育に専心した。嚴復は科挙を目指して、7歳から塾に通い始め、啓蒙教育を受けた。10歳の時から父親が探すことのできた最良の教師に付けられ、彼の伝統教育⁴を本格的に始めた。当時の教師のなかではとくに嚴復を2年間教えた時点で亡くなった黄少岩という先生の影響がとて大きかったと指摘されている。⁵しかし、嚴復は13歳の時に父親を亡くした関係で、正規の伝統教育は中断されることになった。彼はその時まですでに一定の伝統知識を身に付けていた。その後、福州船政場付設の船政学堂の開設にあたり、生計のため初期生の入試試験に参加した。⁶そこで同郷の船政場長沈葆楨に才能を認められ、彼の助けにより入学できた。その学校で、嚴復は英語の授業が行なわれる操船コースを選んで1871年まで五年間英語、算数、幾何学、代数学、解析幾何学、三角法、物理学、力学、化学、地質学、天文学および航海術などの西洋学を学んで優秀な成績で卒業した。それから軍艦に乗り、船員として勤務して実際に航路にも出た。この間軍艦「揚武」で長崎、横浜など日本の各地を巡航したこともある。この日本行きに関して何か記録を残したかどうかは未詳だが、明治10年前後の日本については一定の印象を残したと思われる。またさらに勉学を続けるため、1877年イギリスに派遣されることとなり、ポーツマス大学院に学んだあと、グリニッジの海軍大学に転じた。その間にフランスにも遊歴した。彼はイギリスで海軍知識ばかりではなく、その政治、経済、社会制度を特に熱心に勉強し、1879年の帰国までの2年3ヶ月間にスペンサー、ダーウィン、ハックスレー、アダム・スミス、モンテスキューなど、たくさんの近代思想に関する本を読んだ。また留学期間中、当時の初代駐英公使郭嵩燾と頻繁に西洋科学や思想などを談論し、⁷郭から高く評価された。嚴復は後年、モンテスキューの『法の精神』の訳書のなかで自らの留学経験について回想している。イギリスの法廷で裁判の過程を見学し、それに心を奪われた嚴復は、郭嵩燾に向かって「英国とヨーロッパ諸国が富強になったのは、公理が日に日に伸張されるからである。それこそが源泉である」と述べている。嚴復はイギリスの富強をその目で見、その体で体験した。そして、このような体験は、中国の富強のためには、西洋の制度や技術の元にある思想を根本から学ばなければならないと決心したのである。そこで嚴復は豊富な西洋知識を身につけて帰ってきたが、彼の伝統的な教養も並ではなかった。郷紳層の家庭で育ったため、彼のなかには中国の伝統思想が深く刻印されていたと考えられる。

ところで、1870年代から同じアジアの国日本も海軍を建設し始め、人材を育成するため1871年から海軍留学生をイギリスに派遣するようになっていた。第

一陣の12人のなかに後に日清戦争で中国のイギリス海軍留学生と対面した東郷平八郎がいる。彼は1877年に6年間の留学生生活を終え、英国の造船場で日本軍が注文した軍艦の製造を監督するように命じられ、1879年までイギリスに滞在した。ちょうどこの時期嚴復もイギリスにいた。日本の海軍創設に注目していた公使郭嵩燾との付き合いから、嚴復は東郷平八郎と面識があったかもしれない。陳宝琛の書いた嚴復の墓誌銘には、1879年日本に琉球列島を譲ったことに対して嚴復が深く絶望していたことが述べられている。英国における留学生仲間であった日本人たちは、だれもがそのエネルギーを日本の富強の創成に用いることができたのに比して、彼は局外に取り残されたままであった。「後30年もたたないうちに、わが国の属国はすべて吸吞され、彼らは老いた牛のようにわれわれの鼻づらをひきまわすであろう」と、嚴復が語ったと伝えられている。⁸

帰国後、嚴復は最初母校の福州船政学堂の教官に任命されたが、一年後李鴻章の招きで北洋水師（海軍）学堂に移り、そこの教務長、副校長、校長を歴任した。教職に命じられたのは、嚴復と同期のイギリス留学生12人の中に、彼一人だけだった（ただし、薩鎮冰が4年ほど教官に任命されたことはある）。嚴復の帰国後の仕事については、彼の留学中にすでに決められていた。公使郭嵩燾の日記によると、洋務大臣李鴻章が留学生担当官李鳳苞に宛てた手紙に嚴復の配置方向についての指示があることから、それが分かる。なぜ嚴復だけが教職に選ばれたのかについては、彼が留学当時すでに文人氣質や弁舌の才を表わしていたことと関係があると思われる。郭嵩燾の日記を読むと、「嚴宗光の話が一番流暢である」とか「縦横無尽に議論する」といった記述が散見される。また嚴復が学校で習ったことを公使館に行って皆に話し、時にはこれが公使館員の現代科学の啓蒙教育にもなった。郭嵩燾自身も日記に何箇所も嚴復の話引用している。⁹留学生担当官や駐英公使などの報告から、洋務大臣李鴻章は嚴復の配置を決めたのだろう。この点からみると、李は嚴復を彼の才能によく適した職に就かせたと言える。しかし、彼はこの職に就いてから結局李の信頼を得られなかった。近代西洋思想を身につけた嚴復の国の政策に対する考えが洋務大臣李鴻章の考えと食い違っていたのは不思議なことではない。嚴復は北洋水師学堂にいる間に科挙試験に望みをかけて努力もしたが結局は失敗に終わった。このように官途は思い通りにならなかったが、西洋思想の動向への関心は止まらなかった。嚴復はイギリスから帰国した後も英語の文献を読み続けた。

3. 多年の蓄積の成果——早期の四つの論文を中心に

嚴復が北洋海軍学堂の校長を務めていた1894年に日清戦争が勃発し、翌年の1895年中国は敗北によって終戦を迎えた。この敗戦が知識人層に与えた衝撃は極めて大きかった。この時期、進歩的知識人達が共有した目標は祖国の滅亡を救い生存をはかることだった。国家に対する危機意識は、彼らに救国自強の思想を探し求める動機を与えた。さらに新思想を精力的に導入・摂取させる気風をもつくれた。これに伴って国の政治制度に対する維新運動が高まってきた。またこの敗戦の事実はまさに「夷の長技を師として以て夷を制する」（魏源）という方針の敗北を意味した。つまり西洋の軍事や軍事産業技術に力点を置き、それに長じて、それはあくまで「用」にすぎず、「体」にはならないことが暴露され、それまでの洋務思想の欠陥が明らかになったのである。しかし、政治の主導権を握る知識人たちはこのような洋務思想を改める気配はなく、さらにそれを強化しようとしていた。例えば1896年に孫家鼐¹⁰は「議覆開弁京師大学堂摺」で打ち出した方針で、相変わらず「中学を主となし、西学を助け役となす。中学を体となし、西学を用となす」と述べている。またこの後にも、張之洞¹¹が『勸学篇』の「会通」でもう一度これを提起し「中学を内学となし、西学を外学となす。中学をもって身心を治め、西学をもって世事に応ず」と主張している。このような中学、西学に対する考え方は、上の張の著作が「上諭」（詔書）によって各省に頒布されたことにより、西洋物質文明に対する当時の清朝政府の基本的態度にもなった。

この戦争で北洋海軍の主力が全滅した。同海軍には嚴復のイギリス留学時代の同窓である劉步蟾、林泰曾、林永昇、方伯謙などや、彼が14年間近く勤務し教えてきた学生の数多くが所属していた。日清戦争の敗戦による衝撃は同時代の知識人と比べても、彼にはより直接的で、鮮烈なものであった。そこで嚴復はもう黙っていることができず、長年抑圧し蓄積してきた考えを一気に一連の論文にして吐露した。それは彼が天津の『直報』¹²に連続して発表した「論世変之亟」（「時勢の激変について」）、「原強」（「力について」、後に続編も書かれた）、「辟韓」（「韓愈を駁す」）、「救亡決論」（「われわれの救済について」）の4つの論文である。これらの論文について、B.I. シュウォルツはこう評価している。

わずか一年（1895年）の間に書かれたこれらの論文は、当時の嚴復の全体的世界像を驚くほどよく明らかにしてくれるものであり、以後数年間における彼の翻訳活動を支える基本的前提のすべてが、これらの論文によって明示されたのである。嚴復が、後年、ハックスレー、スミス、モンテス

キュー、ミルの翻訳に織り交ぜた多数の注釈は、これらの論文に照合してみると、予想もしなかったほどの一貫性をもっていることが明らかになる。結果として、これらの論文は、嚴復の翻訳全体に対する一種の序論となっていたわけである。¹³

この評価が正確なものだとすれば、嚴復の初期論文の研究によって彼のその後の翻訳やそこに込めた真意をより正しく理解できることになるだろう。また、嚴復の初期言論活動における西洋思想の位置づけについて、近年研究者の間で従来の定説に異議を唱える傾向が見られる。以上のことを踏まえて、続いてこの4つの論文を中心に嚴復が言論活動を始めた時点の思考の立脚点、とくに彼のなかの中国伝統思想と西洋思想との葛藤や当時の洋務思想や変法思想に対する考えを詳しく検討してみたい。

3. 1 「論世変之亟」

嚴復は「論世変之亟」¹⁴でまず歴史変化の原因を「運会」¹⁵に帰している。例えば冒頭で次のように述べている。

時世が何によって変るかその原因は分からないが、強いて名づければ運会といえよう。運会が形成されると、聖人でさえこれをどうすることもできない。つまり聖人もこの運会の内部の一つのものにすぎず、内部の一つのものである以上、運会そのものを転換できる道理がない。聖人とは、ただ運会がどこから来たかを知り、どこへ行くかを予見するにすぎない。どこから来たかを知るから、「天におくれて行動して天道の動向に従い」（『易経』「乾」）、どこへ行くかを予見するから、「天に先んじて行動しても天道の動向に違反しない」（『易経』「乾」）のである。そこで天地の道を補佐し、過ぎたるをけずり、足らざるを補って、天下を太平にする。後世の人がその事業の成就をみて、ついに聖人が本当に運会そのものを転換できるかのように思うが、聖人にはもともとそんなことはできはしないということを知らないのだ。¹⁶

運会は聖人によって変えられるものではない。そして聖人が天下を安んじたのはただ運会の趨勢を知り、天に順応したからである。ここで嚴復は自分の主張、即ち社会（歴史）は進化するものだという進化論的考え方をはっきりと打ち出している。と同時に、彼は聖人の絶対性を相対化する。そして続いてすぐ後に彼は中国と近代西洋の差異を説明し始める。「中国の道理と西洋の道理と

が決して一致しない最大の相違点は、中国人が昔を好んで今をおろそかにし、西洋人が今に力を尽くして昔を乗り越えようとするところにある。中国人は一治一乱、一盛一衰を自然と社会の本来の姿と考え、西洋人はたえず無限に進歩し、盛んになれば再び衰えてはならず、治まれば再び乱れてはならないということを、学術と政治の根本原則とする」。 (同上注16) これは正に中国の急所をずばりと言い当てていると思われる。つまり中国と西洋にある根本的な差異は思想にある。西洋の賢者は進化の過程を明確に理解している。だから彼らは進化の諸力を解放して有効に利用し、それを近代社会の発展の動力とすることができたのである。また、中国が西洋のこの科学の根本思想を理解しなければ、いくら彼らの科学技術や政治のやり方を学んでも結局は形にとどまらざるを得ず、いつまで立っても自分のものにはできないだろうということである。

ここではまず嚴復の西洋思想への肯定が読み取れる。しかし、自分たちの中国伝統思想が劣っているわけでもない。嚴復は中国の賢者が物事の進化を知らないのではなく、ただこの進化に対してとった方法が西洋と違っているのだと指摘する。それは、中国の聖人は「人民を生かす道として、相互に争わず相互に養うことを目標とするからだ」。 (同上、424頁) ここで嚴復は、特に科挙はその試験勉強が人を愚昧にし、人の精力を消耗させ、それによって人間間の争いを防ごうとするものだとして強く批判する。また「西洋人などというものが現れ、額が突き出て目がくぼんだ彼らが、辮髪を編み襟を結んだ中国人の中に雑居するようになってから、わが四千年の文明が、すでに崩壊をはじめている」(同上、425頁) 今日もなお相変わらずこの方法を継続していることは根本的な間違いであり、「今日になってやっとその危険に気づくのは、昔斉の桓公が痛みを感じた日を病気にかかった初めだと考えたのと同じことである」(同上) と強い危機意識を表明している。そして今の人はこの危機に気づいても、偏見によって西洋の形而下の末端しか見ることをせず、その生命の根源を捉えていないという。さらに、西洋の生命の根源を纏めて、「要約して言えば、学術において虚偽を退けて真実を尊び、刑法、政治において『私』を抑えて『公』を実現することにほかならない」(同上、426頁) という。ここに至っても、嚴復はやはり彼我を比較することを忘れていない。「この二点は、もともと中国の道理と異なるものではない。ただ西洋人が常にこれを貫徹し、中国人は常にこれに失敗してきた」(同上) のである。その原因は「自由と不自由の差異による」と嚴復は分析している。中国歴代の聖賢は自由を恐れ、自由を根本として教えを立てたことは一度もない。しかし「中国の道理で西洋の自由と最もよく似ているものは、『恕』と『絜矩』である」と彼は述べている。

嚴復がいう「恕」や「絜矩」は一体何を意味しているだろうか。『論語』には

次のような言説がある。「子貢問うて曰わく、一言にして以て身を終うるまでこれを行なうべき者ありや。子曰わく、それ恕か、己の欲せざる所を人に施すことなかれ」(衛霊公第十五)。孔子は「恕」をもって儒教の最高道徳の「仁」を解釈したのである。この「恕」とは、即ち思いやりである。また、このような考えは『大学』では「君子は絜矩の道を有している。……上からの嫌悪するものは、それをもって下に使うべからず、下からの嫌悪するものは、それをもって上に仕えるべからず。(中略)これがいわゆる絜矩の道である。」と書かれている。朱子の解釈によれば、「絜は度であり、矩は方である。己の心を定規として人の心の度をはかり、人の悪むところも己のそれに異ならない、ぴたりと一致するということを知れば、己の悪むところを人に施そうなどとはしないであろう」ということになる。即ち人の気持ちを推測し、その望みをかなえてあげることである。嚴復の論に従えば「恕」や「絜矩」は「他人に対する関係をいう」が、「他人に対する関係の中にかににして自己を位置づける」かに関しては、西洋の自由と似ているが全く同じものではない、と彼はまたそれらをはっきり区別する。

そこでこの差異からまた多くの相違が生じるが、「これらのことがすべて中国の道理と対立しながらこの世に併存しているが、私は実は性急に両者の優劣を決定しようとは思わない」。結局嚴復は、今までの研究者の定説では「全面的な欧化主義者」となっていたが、必ずしもそうとは言えず、少なくとも彼は西洋近代思想を中国の伝統思想と対等の位置においていると言えるだろう。この論文の結論部で嚴復は、「士大夫が今日に生きながら、西洋の富強の現実を見ないとすれば、それは眼がない者である」といい、中国の士大夫が私心私利を投げ捨てて、時務に通達する真の人材を起用し、西洋の術を用いて富強を図るべきだと人々に呼びかける。ここで注目したいのは、中国の危機を解決するために、嚴復は康有為のように中国思想、儒教思想から方法を見つけようとするのではなく、必ず西洋思想を出発点としているということである。これは、二つの思想をまず対等の位置に置いて、保守層に過剰な刺激を与えずに、中国の伝統思想を利用して近代化に必要な西洋思想を説明し理解してもらおうという意図だったのだろうか。彼の後の言論から見れば必ずしもそうではないようである。

3. 2 「原強」

上述の「論世変之亟」の一文が先ず西洋国家強盛の要因を中学と西学との対比的な見地から提示することを本旨としているとすれば、次の「原強」¹⁷⁾は西洋国家富強の根源を直接問い、その本質を紹介するのを目的としている。この論

文は末尾に、「民智の何を以て開化するか、民力の何を以て厚くなるか、それに民徳の何を以て明らかになるかの三者は、皆今日の最もの急務であり、また後の言を待とう」と書かれており、未完成の作のようにみえる。だが、同じ月の29日に同じ『直報』に発表した「原強続編」は、内容的に「原強」とのつながりが薄いことからして、彼のいう「後の言」はこの後に発表する「辟韓」と「救亡決論」のことを指していると理解して良いだろう。

「原強」が発表された翌年に、梁啓超がそれを自分の主宰している『時務報』に転載する許可を求めた。これに対して嚴復はそれが一年前のものなので書き改めてからまた送るという返事をした。書き直された「原強」は大きく増補され、字数は元の倍にもなった。しかし、どういうわけかこの文章は結局『時務報』に掲載されなかった。

この論文はダーウィンの進化論とスペンサーの諸説が「西洋人がこの五十年來孜孜として求めている、近いことは身を守り、人を治め、遠いことは利民經国することのできる一大事」と紹介している。特にスペンサーについては、「進化論の方法を用いて、人間関係と社会秩序を説明し」て、「ごく最近の科学原理を用いて、修身齊家治国平天下の原理を明示している」¹⁸という。またその「群学」（社会学）を紹介する際には、「彼の論を簡単に言えば、その節目支流、我が『大学』の所謂誠意正心、修身齊家治国平天下の原理と図らずも一致している」と嚴復は述べている。ただ『大学』は問題を引き出しだけで詳しく論ずることなく、言葉が簡単すぎて意を尽くしていない。それに対してスペンサーの書は精密で意味が深く、物事を論ずる際、必ず根拠を挙げて深く研究している、とスペンサーを中国の古典と対照させながら論を展開している。

そこで嚴復は中国の現状分析に入る。自国のことをよく理解して西洋のことをもよく知っている人材は大変乏しいことを、嚴復は先ず指摘する。官位に就いている人はみな保守的で、西洋に対する知識をまったく持っていないし、知ろうともしない。彼らは自分たちの利益ばかりを考えて国のことには関心を示さない。エリートたちもこうだから、庶民はなおさらのことだ。だから、危機にあっても、西欧諸国のように起死回生の改革を断行することはできない。ダーウィンやスペンサーの進化論の言うように、中国はついに滅びるのだらう。また西洋からの危機は、中国歴代の異民族による危機とは違う。世界の人種分類からみると、異民族危機は同じ人種間の闘争で、現在中国と西洋の間に生じているのは人種と人種との闘争である。この闘争が今までとは全く違ってもっとハイレベルな危機であることを嚴復は強調する。同じ人種間の異民族闘争にも、「質」（物理的、力）を持って勝つと「文」を持って勝つ、の二通りがある。力を持って勝つのは遊牧民のような民族で、強いは強いが進化していな

い。中国の民は進化しており、「文」を持って勝つ国である。即ち少数民族は「無法」（法を持たないこと）で勝つが、中国は「有法」（法を持つこと）で勝つ。しかし、中国の法にも弊害が生じるから中国は時々異民族に支配されるのである。またこれらの異民族は法を持たなくても自治には問題はないが、中国で異民族王朝を築いてからは、かえって中国の法を棄てられなくなり、ついに中国に同化されてしまう。この意味では異民族もずっと中国に制せられていたと嚴復は指摘する。しかし今の西洋はこの同人種の異民族とはまったく違う。まずは人種の違いがある。それから今の西洋の人たちは「質」と「文」の両方を持っている。体格、力は我より大きい。またその法は「自由を体とし、民主を用とする」。よって「ことを行なうに學術に従い、學術においてまたすべて事実に基づく」のであって、「無法」と「有法」を併用して我に勝つのである。さらに、欧州においては民や国の生存競争が常に行われているから進化も止まらず、故に法も日ごとと月ごとに新しくなっている。このような法に中国の法が遭遇したら滅びるに違いない。

このような危急存亡の状況から国を救うために、世の有識者は二つの方向を目指していると嚴復は指摘する。一つは、国の不振の原因を法に帰すのではなく、下民が法に従って働かないからだとする伝統主義の方向である。彼らは「祖先が作ってくれた法があるから、我々はそれにきちんと従いそれを用いれば、実力が付いてくる」といい、行政を監察し、不正を検挙すべきことを説く。嚴復はこれに対して、この方向に向って十年頑張ったとしても中国の貧弱さは変わらないと指摘する。その原因を彼は次のように分析する。すなわち「民智、民力、民徳」が非常に低下しているから、唱える人がいても唱和する人がおらず、善政があっても実行されえない。今の中国の情勢は下へ流れていく水のように、伝統から法を求めても、堰を作って水を遮ろうとしても遮れないように、挽回できないのだと彼は述べている。続いて嚴復は「我富強を欲せば、西洋富強の政ある、その跡にしたがって用いさえすればそれでいい」という西洋主義をも批判している。西洋のやり方で「朝廷において民主を建て、議院を開く、民間において会社を起し、選挙を行なう。また國を挙げて練兵して外国からの侮辱を払拭し、税金を重くして用に足す」として同じ十年立ったら「中国の貧弱はもっと甚だしくなるもの」だと、嚴復は言う。すなわち従来と何も変わらない完全な伝統主義は今の中国によくはないが、西洋主義だけではもっと適していない。嚴復はここで官僚たちの保守主義、当時の洋務思想、または日清戦争の敗戦によって流行りになってきた急進的変法思想に異議を申し立てているのだと思われる。特に変法については、変法することはいいことだが、現実に沿わなくてはならないと彼は主張する。中国の今の現実には正に重い病気にかかっ

ている病夫で、この病夫に激しい仕事をさせることはその死を早めることになるだけである。そこで、嚴復は王安石の変法を例に出し、国の情勢に沿わない変法は国を救うことができないだけでなく、亡国に導くことにもなりかねないと言うのである。

この部分から嚴復の中国と西洋に対する考え方が伺える。即ち、彼は西洋的進歩を肯定しながらも、西洋の方法を学んで、学んだ内容をそのまま中国に適用することに対しては否定的なのである。それは伝統だけに頼ることよりも悪いと彼は考えている。

嚴復はまた「人能く道を弘む。道人を弘むにあらざるなり。」という孔子の言葉引用し、儒教が行なわれえないのは秦以来の愚民の治がそれをマイナスにしたからだと主張する。そして「今富強を図るに、枝葉末節と根本を一緒にやらなくてはならない。…枝葉末節とは例えばロシアがやっているように大樞を回収し、練兵して実力を養成することである。その根本とは、民智、民力、民徳の三つである」。¹⁹嚴復が民の自覚を中国の富強を図る絶対条件として主張することは、よく孟子の民本思想を貫いていると言えよう。またこの「枝葉末節と根本を一緒にやる」というのは、中国の現実に沿って、目前の急場を凌ぐには洋務もある程度必要であることを彼が認めていることを示している。だが、それはあくまでも「枝葉末節」のことである。

続けて嚴復は民の自覚と富強の関係について述べている。「故に富強とは、民に利する政治にはかならない。そのような政治は必ず民が自分を利することができることから始まる。民が自分を利することができることは自分が自由を獲得できることから始まる。また自分が自由を獲得できることは自治できることから始まる。自治できるものは、必ず恕ができ、絜矩の道を用いることができるものである」。²⁰この論述をみれば嚴復は結局中国伝統儒教思想における「恕」や「絜矩の道」から中国の民が自治と自由の可能性を拓き、富強へ繋がる道を見出そうとしていた。

この論文の結末に嚴復はこのように述べ、当時流行っていた「中学為体、西学為用」説を批判する。「中国が今西洋の真似をしているところは少なくない。外務省の開設はその一、造船はその二、招商局はその三、…学校はその八、…、使節を送ることはその十二。これらは西洋のととてもいい制度で、西洋を富強に導かせたものだが、場所を変えたら全く使うものにはならない」。²¹それは根本である民の「智、力、徳」がまだ非常に低いうちに、いくら西洋のいいものを与えても結局それらを自分のものとして育てることができず、正に「顔高の弓、由基それを用いれば、千人に当たるが、童子や弱い人が取ってそれを玩弄すると、怪我をするだけだ」というように、自分に利することはできないばかりで

はなく、かえって自分に害をもたらしことになるのである。

「原強統編」では、上の内容とあまり繋がってはず、主に黄海海戦後清朝側の日本と和議し賠償金を払う動きに対する批判である。

3. 3 「辟韓」

次に嚴復は「辟韓」のなかで、孟子の「民貴君輕」思想をもって、韓愈の君主論を批判した。韓愈は彼の『原道』のなかで、君と民との関係を先験的に決められたものであるかのように語っている。これに対して嚴復は、韓愈はただ一人の君主を知っていたが、億兆の人民を知らなかったと述べている。つまり、韓愈が孟子の民本思想をよそに、君主の側に立って「道」を論じたのは、民を無視しているということである。嚴復は近代の西洋思想の文脈をふまえて君と民との関係について論じた。君主が民によって選ばれたのは、あくまでも民が自らの生産活動を順調に進め、自らを守るために求めた結果であった。また君が存在している理由について、「民を守る必要があるのは、強暴、詐欺、争奪、害悪がおこるからだ。強暴、詐欺、争奪、害悪がおこるのは、進化がまだ不十分で、民が完全なる善に到達していないからだ」と述べている。「だから君は天下の不善とともに存在するのであり、天下の善に対応するのではない」²² この文脈から判断すると、いつか進化が十分になり、民が完全なる善に到達できれば、君も自然に必要ななくなるのだと嚴復は考えているように見える。しかしこれに続けて嚴復は、まだその時が到来していない現在のところは君臣を絶対に廃してはいけないと、はっきり自身の見解を打ち出している。彼は晩年までこの考え方を貫いたので、それは当然ながら戊戌政変後に発展してきた革命派の批判的になった。

しかし、重要なのはこの君臣の倫についての嚴復の否定的な評価であり、彼は「それ（君臣の倫）がやむをえないことであるが故に、道の大本とするに値しない」²³と主張した。彼は孟子の民本思想に依拠し、自らの西洋知識をもって、それまで誰も言い出さなかったことを率直に述べた。以上のような視座から中国の歴代の君主を見ると、秦以来の君主は皆大窃国者だ²⁴と嚴復は言い切った。秦以来の民はずっと彼らに馬鹿にされてきたので、今の中国では「民が自治することができない。その原因は才がまだ不十分、力がまだつかず、徳がまだ不完全だから」だ。ゆえに今のエリートは国の富強のために、「朝晩たゆまずわが民の才、徳、力を進歩させる方法を追求し、わが民の才、徳、力を封じ込めているものを除去し、…民に自治ができるように」教育しなければならない。そのためには、エリートはまず自分の囚われた見方から解放されなければならない、嚴復は次に荘子の言葉を引用してこのことを論証する。

「[見識の狭いものとはともに道を語るができない。教に束縛されているからだ]（『莊子』『秋水』）ということばがある。もし自強を求めるならば、六経にさえ使えないところがある。²⁵まして秦以来の法制はいうまでもない」。ここで嚴復は絶対視されてきた中国古典に彼なりの客観的な評価を下している。即ち彼は教条的に伝統を批判しているわけではなく、使えるものは使い、使えないものはあえて使うことなく、古典を盲信すべきではないと述べている。嚴復は他のところで明治の日本人、フレデリック二世、ビョートル大帝を「自ら強力たらんとする熱烈な努力の過程で、百年も前からの制度や国民的習慣を弊履のごとく捨て去った人物」として挙げている。

3. 4 「救亡決論」

前の三つの論文で、嚴復は中国の富強の根本は民にあって、今の中国の民の自覚や自主意識がまだ非常に弱いこと、したがって「民智、民力、民徳」を向上させなければ富強を図れないことを述べてきた。これら民を教育し、その意識を変えて向上させるには、教育者であるエリート層の世界観が変わらなければほとんど何も望めないと嚴復は確信している。そのためにまず除去されるべき最大の障害は科挙制度の内容である。そこで嚴復の「救亡決論」の前半は、主としてこの制度の批判に向けられていた。「今日の中国は改革しなければ必ず滅びる。その改革はどこから始まらなければならないか。八股文の廃止以上に緊急なものはない」と、冒頭からその主旨を明らかにしている。そして現在の科挙制度はエリート全体の知恵を束縛し、心を歪め、道徳を誤らせてきたと論述してから、今のエリートには西学格致（西洋の学問）を講ずるしかないと主張する。そこで、嚴復は当時最も説得力をもった日本の例を出して説明する。「日本は近年格致学校を千箇所設立しその民を教えるが、中国は終始これを行わず、20年経ち、民の智と愚がますます隔たり、彼と利を追い存を争うにはきっと失敗して終わるのである」。そして、『史記』の言葉や自分の経験から、何も知らず知ろうともしない保守的知識人を説得しようとする。『史記』曰わく、学習して智足らぬことを知る。吾等西学に従事してから心を平常にして理を考察してから中国従来政教の是の少ないことと非の多いことを始めて知った。吾が聖人の精妙な原理や言葉なども、また必ず西学を通じてから以てそれを顧みる。それで始めてその精微を窺え、その変えられないことを服する。中国では学を以て明善復初となるが、西洋では学を以て修身して帝に仕えるものとなり、その意味は元々同じものである。²⁶

1870年代と80年代の中国には、西洋文明のすべての革新が遡れば必ず東方からきたもの、即ち自国中国から来たものであることを証明しようとする付会論

があった。この時点の嚴復にも少しこのような傾向が見える。この種の論法、すなわち中国文化には西洋の技術と制度を生み出すのに十分能力が備わっていたが、エネルギーをそちらの方向に向けなただけだということである。しかし、嚴復は西洋が中国文明を借用したとする粗雑な考え方を明瞭に否定していた。「西学も人がすることで、鬼神のすることではない。人のすることだから、その賢い民か愚かな民かを問わず、その日用や常に行うことがみな暗合するところがある」²⁷と彼は述べている。また後に『天演論』の「自序」にもこう言っている。「極端なのは、その学問はみな東から渡ったものから出ているというならば、こんどは、事実には無関係に、まさに自分自身を愚昧にする説となる」。²⁸ここで嚴復が古代中国と近代西洋のある理念のあいだに類縁性が存在することを心から信じていると感じ取れる。同時にこのことは彼が西洋思想を中国読書人に勧めた理由でもあったと考えられる。嚴復は『天演論』「自序」に「古書を読むは難しい」と感嘆し、「後世の人が古人の書物を読みながら、古人の学問を治めなくなつてからと言うもの、古人が会得して理だとした事柄からして、すでに感じ取り方に深淺の差がある」という。それでわが古人の学問を発掘するために西洋の学問をその手がかりとして使うことができる、と嚴復はまた次のように述べている。「古人が託して伝えようとした理は、もしその理が真に優れた物であり、その事柄が本当に真実な物であるならば、時代や風俗の差によって、食い違いが生ずることはないのである。だから、こちらに伝わらないで、あちらに見えることもあり、申し合わせもないのに一致することができる。道理を考究する人が、あちらで得られたことを、逆に、わが古人の伝えたものによって証明することができれば、透徹明白でまるで眠りから覚めたようであり、これこそ異国の文字言語を治めるものの最高の楽しみである」。²⁹

今の中国が西洋からの危機を乗り越えるには、彼らの技術や政治のやり方を学ばなければいけない。これらを学ぶにはその根本思想を理解しなければ、結局は形だけを学んで彼らを超越することはできない。超越できないと彼らに勝つことができず、自分たちが滅びるしかない。こう見ると、嚴復はやはり魏源が提起した「夷の長技を師として以て夷を制する」思想をもって改革を考えているように見える。しかし彼はこの思想を技術の超越から思想の超越へと高めたと考えられる。魏源がこの考えを主張した当初は、海防や軍事的技術面の超越だけを意図していたが、とくに洋務運動が興ると、自分たちの思想をどのように位置づけるかが問題になり、それは積極的な洋務運動家によって「中体西用」論にまで発展したのである。しかし、日清戦争の敗戦をきっかけとして洋務運動の欠陥が暴露され、維新変法の声が上がった。変法には新しい理論的根拠が必要になり、康有為が大同思想を持ち出し、嚴復がある意味で夷の思想を

知り、以て我をも理解し、よって夷を制するという考えを持ち出したと言えるだろう。彼は西洋思想を「夷の長技」として理解するのではなく、それをエリート知識人が自国の古典をより正確に理解するための道具、すなわち「長技」として用いようとした。エリート知識人は古典を正確に理解し、それによって正しい方法を用い、民を教育し民の「智、力、徳」を向上させなければならない。民の「智、力、徳」が向上すれば自然に「枝葉末節」的な技術の習得も可能になる。

最後に指摘しておかなければならないことは「論世変之亟」と「原強」で論及された「怨」と「絜矩の道」は、翌年の「原強」の「修訂稿」において「故にその民に自治ができ、自由を得られたのは、みなその力、その智、その徳が誠に優れていたからである」と書き直されている。すなわち「怨」や「絜矩の道」は「民の『力、智、徳』が優れ」で置き換えられている。

1895年に発表された一連の論説と、その翌年に書かれた「修訂稿」との間における微妙なずれは、彼の迷いを示している。西洋を体験し、その近代思想を十分に吸収した彼は、同時に中国の伝統的知識人でもあった。危急存亡の前にして、西洋思想と近代思想が絶えず彼のなかでぶつかり合っていた。彼は中国伝統思想に注目しながら、その時代に合わない部分を批判した。彼は言論活動の初めからいわゆる洋化主義者ではなく、自国の伝統的価値を信じて、それを近代に生かす可能性を模索していたのである。

4. まとめ

嚴復は政策に関与する官僚の立場を得られず、洋務大臣李鴻章の方針に疑問を持ちながらも北洋水師学堂で14、5年間教壇に立ち、北洋海軍の建設や成長振りを見守ってきた。しかし、ひとたび戦時になるや、すぐさま全滅したという北洋海軍の事実が、まさに彼の疑問を裏付けることになった。そしてこの事実が彼に与えた衝撃は極めて大きいものであった。

嚴復の初期の論文は、翻訳に専念する前の思索の整理と意思表示であると考えられる。問題を提起し、時代が必要とする西洋思想を、中国の具体的な現実に沿って説明していく。嚴復は中国社会に一定の影響を持つ知識人を言論活動の対象とし、中国思想に劣らぬ西洋思想の存在をまず広く訴えようとした。彼は人々に亡国危機を強く意識させるために、進化論の翻訳から着手し、西洋思想を次々に紹介しながら、それらをまず伝統の中国思想と同じレベルに置くことに努めた。彼は西洋思想と中国思想の類似性を指摘しながら、人々の目を

西洋思想に向けさせることに努めた。伝統のなかに深く生きていた彼は、その伝統のなかに自分を引き付けるものと反撥させるものがあることを知っていた。そこで彼は中国の伝来文化を、西洋文化と比べて批評しながら、何が中国文明に欠けているか、或は何を取り除かなければならないかを示そうとしていた。

嚴復は孟子の民本思想を支持し、民の力を重視するが、中国の民は常に愚民視され、聖人の教えがなければ自分から何もできない存在として認識されていた。したがって彼は、中国の富強には根本的に民の自覚が必要だと指摘するが、その自覚のためにはエリートの手助けと教育が不可欠である。民を教育して彼らの自治を可能にするには、まずエリート知識人の世界観から変えていかなければならない。ここに嚴復が西学の導入を提言する理由があった。

晩年、嚴復はしばしば次のような発言をした。「私はもうすぐ古稀になるが、かつて密に哲理を研究し観察した。久しきに耐え弊のないのはやはり孔子の書であることを感じた。『四書』、『五経』に埋蔵されている鉱物がもっとも豊かであるが、その採掘には必ず新式の機械を取り入れ、それを製錬する必要がある」³⁰と。このような発言は彼が伝統に復帰し西学を放棄したようにみえるが、実際はそうではないと考えられる。それは欧州における第一次世界大戦の悲惨さが、西洋文明に影を落としたことと、中国において顕著になった全面欧化の潮流が嚴復の本意に反していたからなのだろう。彼は初めから、全面欧化に批判的な立場を置き、自国の伝統文化を西洋思想の刺激によって近代化しようとしたのではないだろうか。

注

- 1 難しい訳文の解釈、訳文へのコメントなど翻訳者が挿入した語を指す。
- 2 近世中国における社会階層の一つ。郷里に居住する退職官僚や紳士合格者を指す。身分的には一般庶民や下級紳士（官僚を目指し学生など）と明白に区別され、郷里で大きな政治的・社会的発言権を有し、各種の特権を賦与された。
- 3 1821年に生まれ。若いうちから父親について医術を習い、郷里の人々から「嚴半仙」と呼ばれた名医であったが、コレラに罹った人を治療するさいに感染し、1866年に46歳で亡くなった。よく貧しい人々に無料で治療を施した。くわえて、賭博好きだったこともあり、家は恒産なく貧しかった。
- 4 以下、本論に頻出する「伝統教育」「伝統知識」は中国語や儒学の教育・知

識を表わす。

- 5 黄少岩は漢学と宋学を等しく重視したと伝えられる。「漢学」は、広い意味に取れば「考証派」のことであり、「宋学」は宋・元・明の思想家の広範な哲学的関心のことである。19世紀に登場した學派は、「漢」學派の事実に基づく心理の重視、厳密な方法論、文化遺産に関する包括的な知識と宋の哲学者のもっていた哲学的、道徳的、社会的な関心とかが、完全に両立するものである旨を主張する。そこで、黄少岩が実際に宋、元、明の思想家たちの生活と思想をまなぶという課題を厳復に課していたことから、厳復が後年イギリス思想家に熱中するようになったと、B.I.シュウォルツは指摘している。この部分は王遽常『嚴幾道年譜』（上海、1936年）とB.I.シュウォルツ『中国の近代化と知識人 厳復と西洋』に参照。
- 6 当時、多くの若者が科挙を目指して勉強していたため、進んで西学を専門とする船政学堂に入りたくなかった。それゆえ清朝政府は優秀な学生を集めるため、合格者から学費を徴収せず、給与をも出していた。
- 7 『郭嵩燾日記』 3、p406、407、473、474に参照。
- 8 陳宝琛による厳復の墓誌から。王遽常、p 8
- 9 『郭嵩燾日記』 3、p407、473、474に参照。
- 10 孫家鼐（1827～1909）、安徽省寿州の人。字燮臣、号蜚生。晩号澹静老人。清咸豊9年（1859）状元（進士のトップ）。翰林院の修撰として勤めた。
- 11 張之洞（1837～1909）、清末の洋務派政治家。香濤と号。河北南皮の人。湖広総督・大学士・軍機大臣。新式軍隊を編成。京漢鉄道を敷設。著書に「勸学篇」「張文襄公全集」がある。
- 12 『直報』は、1895年1月26日（光緒三十一年正月初一日）ドイツ人の漢納根より天津で創刊され、実際には楊陰庭が主編集人となっていた。初期には、厳復の五編の文章を掲載した。1899年の戊戌変法中には、張之洞の『勸学篇』を大量に転載した。1904袁世凱により廃刊され、同年の6月、『北洋商報』と改名して出版、8月にまた廃刊、9月に『中外実報』として再度出版された。1917年第一次世界大戦中に、ドイツ人の出資が原因となって北洋軍閥政府により最終的に廃刊された。
- 13 B.I.シュウォルツ『中国の近代化と知識人 厳復と西洋』、東京大学出版会。p41～42
- 14 1895年2月4日と5日の『直報』に発表される。
- 15 運命や時世のめぐり合わせ、世界の趨勢、世の中の成り行きのように研究者たちに注釈されている。
- 16 「時勢の激変について」、1895年2月に『直報』に発表され、『嚴復集』第一

- 冊、「詩文」上。王栻主編、中華書局、1986年1月、p1。翻訳文は『原典中国近代思想史』2（西順蔵編、岩波書店、1977年）p422を参照のこと。
- 17 1895年3月4日から9日の『直報』に発表される。『嚴復集』、p6
- 18 『嚴復集』「原強」、p16
- 19 同上、p14
- 20 同上。
- 21 同上、p15
- 22 同上、「避韓」、p34
- 23 同上。
- 24 同上、p35
- 25 同上、p35「六経にさえ使えないところがある」の一文が、『時務報』がそれを転載するさい、「古人の書物にさえ拘泥してはならないところがある」というように変えられた。この変更は嚴復の手によるものが、梁啓超によるものかまだはっきりしていない。ここで参照している翻訳文の『原典中国近代思想史 2』（西順蔵編、岩波書店、1977年、p439）は、『時務報』の版を使っているが、筆者は『嚴復集』の版に従う。
- 26 『嚴復集』「救亡決論」、p49
- 27 同上、p52
- 28 『嚴復集』「天演論」、p1320
- 29 同上、p1319
- 30 『蹇斎臆墨』に収録されている嚴復が英華に贈る詩。

参考文献

以下の文献のうち中国で出版された書籍は、すべて筆者が翻訳して引用した。

- ①王栻主編『嚴復集』、中華書局、1986年
- ②王遽常『嚴幾道年譜』、『民国叢書』第三卷、77、上海、1936年
- ③郭嵩燾『郭嵩燾日記』、湖南人民出版社、1982年
- ④孫応祥『嚴復年譜』、福建人民出版社、2003年
- ⑤西順蔵、島田虔次編『清末民国初政治評論集』、中国古典文学大系58、平凡社、1961年
- ⑥西順蔵編『原典中国近代思想史』、岩波書店、1977年
- ⑦B.I. シュウォルツ、平野健一郎訳『中国の近代化と知識人 嚴復と西洋』東京

大学出版会、1978年

⑧李曉東『近代中国の立憲構想』、法政大学出版局、2005年